

巻頭言

茗溪塾

2007.12月号

茗溪塾教務部 03-3659-8638

受験は心の勝負です。2007
ピンチがチャンス！

茗溪塾塾長 宇野 雅春

「月山」という小説を知っていますか？昭和48年の芥川賞受賞作です。多分、余程丹念に読み解かないと、ちょっと退屈な作品にしか見えないと思います。この小説が、特に印象的な訳は、森敦という人が、この受賞の時61才と11ヶ月という高齢であったことです。旧一高（今の東大）時代に既に才能は菊地寛などに認められていて、将来を嘱望されていたといひます。名作を書かなければならないというプレッシャーに押されて、一作も書かないまま何十年も諸国を放浪していたという履歴も凄いのですが、それが61才でいきなり、芥川賞受賞という形で登場したわけですから、私は強烈な印象を受けました。

その後、TVのコメンテーターや人生相談にも出ていたので、もしかしたら知っている人もいるかもしれません。ある時、TVの人生相談を見ていたら、その森敦さんが出ていました。生きていくことに自信を無くし、自分の窮状を訴える相談者に、森さんが言った言葉が、私の胸にぐさっと来ました。どんな言い回しだったかは定かではないのですが、それは今まで聞いたことのない言葉でした。「あんたねー、凄く追いつめられていると思ってるけどね、人間にとって、とことん落ちた時が、チャンスなんだよ！」こんな言い方だったように思います。一番辛くて、苦しい時が、人生のチャンス！これって何だろうと思ひながら、自分なりに納得できました。

自分の人生を振り返ってみても、確かに、ピンチと思ひえる辛い局面は沢山あったと思ひます。でも、よくよく思ひ返してみると、追いつめられた時に確実に自分が変わり、そこから次の大きな飛躍があったように思ひます。

小説「月山」は、山形県にある月山のおもとにある注連寺という寺に主人公の「わたし」が居候して一冬を越すという話です。何の起伏もなく淡々とした話なので、ドラマを期待して読むとがっかりすることにもなります。世の中から完全に隔絶された世界に憧れて来たであろう主人公が、「冬の果てしなさ」に耐え難さを感じて春の訪れと共に徐々に月山を離れようと思ひ始める…その心の動きがともすれば、読み飛ばしてしまいそんな小さなエピソードの積み重ねで表されています。還暦を過ぎた森敦がその才能を開花させることなく窮極の無へと自分を追いつめていった時、そこで見た物が自分の思ひとは違ひ、言ってみれば「死の世界」とでも言うべきもので、それを見つめるところから「人生の再出発」という思ひに至ったということなのではないか（勝手な解釈ですが）と思ひます。

受験が始まっています。大学入試ではAOや推薦、中学入試でも一部第一志望の受験がありました。早く生徒を集めたい学校側に、早く受験を終わらせたい受験生の意向が一致して凄ひ倍率になっています。「不合格」が出た時は辛いものです。自分の今までの勉強や努力のすべてを疑ったりすることもあると思ひます。この辛い気持ちをどこに向けていくのか、そこがその人の分かれ目になります。感情に流されて自暴自棄になったり、勉強自体が手に付かないくらいに後悔したりでは、次の失敗は決まったようなものです。

ピンチの時がチャンス！です。ピンチの時が辛いのは、自分を見つめ直さざるを得なくなることです。その結果、悩みます。それがとても苦しいことなのです。

でもいつまでも悩んでいるだけでは、解決はありません。目標をもう一度確認し、「心を決める」ことが大切です。人生は長くやり直しはいつでもできます。自分を見失わず、結果をきちんと受け止める決意さえあれば、必ず大きな成果に結びついていきます。まだ受験はこれから、いろいろと大変なことはあるとは思ひますが、大変であればあるほど、「チャンス」が来ているのだという気持ちは持ち続けていってほしいと思ひます。森敦のレベルとは明らかに違ひと思ひますが、受験も「ピンチと感じた時が、チャンスである」と私は常々思ひています。